

"仕事村"から"ゴリラ村"へ—伝統でないものとしての自然—
@稲盛会館 213 号室

竹ノ下祐二

2014/7/21

1 はじめに

1.1 「ヒトづけ」

- 霊長類の野外研究の手法：研究対象およびその生息環境（生態系）に対して可能な限りインパクトを与えないよう細心の注意
 - 「空気」になる
- しかし、現実には空気になるのは困難：保全家の批判の対象

1.2 霊長類の野外研究の地域住民へのインパクト

- 霊長類研究者は、地域住民やその生活環境（社会・経済）に多大なインパクトを与えている。
 - 「空気」の対極：人類学者の批判
- 「空気」になるのもいけないこと：保全家からの批判

1.3 人類学者は地域においていかなる存在か？

- 霊長類研究者：熱帯森林における外部のアクター・ステークホルダー
- 人類学者は自分自身のインパクトを語っているか？
 - 例) ストレスモニタリング

1.4 自然の代弁者 v.s. 住民の代弁者という図式の欺瞞

- ガイドライン自由集会のコメンテーター
 - 保全セクター
 - 住民セクター
- 保全セクターが自然の代弁者でないことはすでにあきらか
 - 協同したくば、人類学者はまず住民の代弁者のふりをするのをやめよ

2 アクター・ステークホルダーとしての類人猿研究プロジェクト

2.1 調査年表

1999 訪問

2000 予備調査

2001 協定、雨量計の設置、車を買う（継続への意思）

2002 果実センサス、糞分析のルーチン化（継続への意思）

2003 村に家をたてる、安藤の投入

2006 ヒトづけの進行、ガボン人研究者の投入、環境省プロジェクト
2009 SATREPS プロジェクト
2014 ?

2.2 "仕事村"

- "Doussala" という村名の由来
 - Je suis venu travailler.
- 地域住民の権限を補償する国家体制
 - 行政機構
 - 政治家
 - 司法
- 「ソシエテ」「プロジェ」
 - 外部のステークホルダーを指す概念

2.3 「伐採会社が去り、お前たちがやってきた」

- あらたなパトロンという立場
 - 雇用
 - 橋の修繕、道路の整備
 - 教育、医療支援
 - 日常的なファシリティの提供
- 伐採も保全も研究も同じ
 - 誰にとっての sustainable use か
- 立場の表明
 - 住民のために何かをしにきたのではない
 - ソシエテではない、パトロンではない
 - * 拒否されたらいられない
 - * われわれは利益を提供しないが、一緒にやっていたら、将来いいことがある

3 頼りにならない伝統：ムカラバの特殊性

3.1 脆弱な在来知

- 霊長類研究における在来知やローカルガバナンスの"利用"
 - 日本
 - * ワンバ：ボノボを食べない人々
 - * 名物トラッカーたち
 - 外国
 - * 研究方法としての「ピグミーの利用」：Tutin & Fernandez
 - * ゴリラとチンパンジーのネストの区別：Blom et al.
- ムカラバにおける在来知の"惨状"
 - 伐採会社での就労経験が森林知識の源
 - * 混乱する植物の現地名
 - * 幹はわかるが葉や種子はわからない

- * おおざっぱな植物名称
- 何も知らない若者

3.2 脆弱な institution

- (承前)
- トラッカー推薦制度の破綻
- 村でのもめごとを日本人が調停する

4 "仕事村"から"ゴリラ村"へ：ゴリラのヒトづけの成功 (美しい懐古談)

4.1 日本隊とは何だったのか？

- 統治機構との脆弱なつながり
 - 「ソシエテ」や「プロジェ」で雇われない人々の受け皿
- そこにいつづけたこと
 - 手作りの家を建てた
 - 帰ってきた
 - * 日本人の「宿題」を3ヶ月やりつづけた住民

4.2 ゴリラのヒトづけがもたらしたものの

- 成功体験の共有
 - 地方都市で「俺がグループ・ジャンティ隊だ」
- 在来知の蓄積、更新
 - 「チンパンジーは泳ぐがゴリラは溺れると教わってきた」
 - 「子どもの頃に聞いた昔話は、何らかの裏付けがあるのかもしれない」
 - 「男たちが口をたいて真似するから、ゴリラもそうするのだと思っていた」
- 在来知の不本意な変容
 - 呪医のいやがらせ

5 "ゴリラ村"から"仕事村"へ：PROCOBHA の「失われた5年」

5.1 統治機構に組みこまれる類人猿研究

- プロジェクトの肥大化：GERF, SATREPS
 - 「研究者」というアクターとして不可避の選択
 - ガボン人研究者との共同
- PROCOBHA につきつけられる "No"
 - 連判状事件 (2009年)
 - 幽霊事件 (2010年、2011年)
 - ストライキ (2012年)
- 雇用契約の成立

5.2 日本隊の奇妙な位置づけ

- SATREPS 中間評価団との団交
 - 「PROCOBHA は何もしてくれていない。何かしてくれたのは日本人研究者だけだ。」
- 雇用契約成立記念セミナー
 - 「これまでの協力を村として感謝する」
- 日本人研究者：地域によりそい、「下からの従属」を支える存在？

6 ふたたび、"仕事村"から"ゴリラ村"へ

- 「ゴリラの物語ツーリズム」の試み
 - ゴリラ調査を村の生業にする
 - * "地域"の"伝統的"な"自然との共生関係"は存在しなかった
- 「インタープリテーション」
 - ローカルな価値観をグローバルな価値観に"翻訳"する手法
 - * 翻訳する努力がローカルな価値観を生みだす
- 「失われた5年」への抵抗